

鬼来也

(上)

高木彬光



鬼来也

(上)

高木彬光



東京文藝社

鬼
来
也

三九〇円



昭和三十九年三月十日印刷
昭和三十九年三月十五日発行

著作者 高木彬光

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社

東京都新宿区弘方町一
振替・東京二一七五七
電話・(三六〇)二五五〇

鬼
来
也

目次

逢魔ヶ時	五
死を呼ぶ駒	三
田沼殿	七
千両勝負	九
風林火山	二六
鬼探し	二八

牡丹屋敷

一六〇

鬼の一族

一六四

狂奇人

二〇七

毒蜘蛛

二三八

妖魔の座

二五三

女怪

二六九

装幀 村上 豊

中将棋駒の配置図

【片側のみ】

			仲人					仲人			
歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵
横行	豎行	飛車	龍馬	龍王	獅子	奔王	龍王	龍馬	飛車	豎行	横行
反車		角行		盲虎	麒麟	鳳凰	盲虎		角行		反車
香車	猛豹	銅将	銀将	金将	王将	醉象	金将	銀将	銅将	猛豹	香車

逢魔ヶ時

鉛の雲に切れ目もなく、晴れ間を見せることもない五月雨の宵は、冬よりも早くせまって来る。

昼から夜に移ろうとする一瞬、俗に逢魔ヶ時といわれるこの刻限には、人か魔か、見分けもつかぬ怪物が、大手を振って巷を横行しはじめるといわれている。

だがいま鎧の渡しの前を、一名玄治店といわれるこの茅場町の一角へ急いで来た町娘は、人かと見ればあまりに美しく、魔かと思えばあまりにも清純に見えた。

「おや、おせんさん、いまお帰りで？」

折から店先に出ていた植木盆栽屋の久作が、お世辞笑いもたつぷりと、小腰をかがめたのに、傘を持つ右手を軽くそらして、

「ええ、早く帰らなくっちゃと思つて心配してたんですけれど、この雨でしょう。つい遅くなつちまつて」

と青貝のような八重歯を見せて笑つた。

「そいつはいけねえ。何といつても親一人子一人、仕事のほかには何も目のねえ親方だつて、心配していなさるには違えねえ。早く帰つておあげなせえな」

「ええ、何しろ、うちのお父つあんときた日には自分で居留守を使うくらいですからね——わたしがいないと、いったい何をしていることやら」

もう一度、何の邪心もない笑いを残して、

「それじゃあ、おじさん、御免なさいね」

その美しい姿は、静かに霧雨の中へ去っていったが、暗い陰気な店先にも、その後まで一沫の明るさと華やかさが尾を引いて残っているようだった。

これも美女だけのひとつ一徳かと、その後姿を飽かず見送っていた久作へ、

「親父！」

店の中から鋭く呼びかけて来た声がある。

年の頃三十三、盆栽の松をなでていた商人風の男だった。

身なりはずぶの堅気と見えるが、その顔にも体にも、凄じかりの闘志と精気とが溢れて見える。「その声も重く力に満ちて、人を威圧してくるような調子だった。」

「へえ、これをお買い上げくださいますんで」

と近寄って来た久作に、声をひそめて、

「いまのは誰だ？ あの娘は？」

久作の態度も一瞬に変わってしまった。じつとあたりを見廻しながら、ささやくように、

「親分、やっぱりお目が高うござんすねえ。あれはこの近くの駒作師、鬼雷斎という男の娘でおせんといひやす。新茶も出ばなの十七で」

「駒作りというと将棋の駒か？ 鬼雷と銘のあるあの駒の作者か？ 江戸三奇人の一人だな」

「へえ、三奇人には入らなくても、六奇仙には入るだろうと、もっぱら近所の評判でさあ——親父の方は、顔も疱瘡のあとだらけ、まるで鬼瓦にぶつぶつと穴をあけたような御面態だというのに、その

子にどうしてあんな器量よしが生れたのかと、鳶が鷹を生むということはあるにせよ、こりゃあ町内の七不思議で」

「妙だ……」

「何がでござんす？」

「あの娘には死相が出ていた」

久作はぶるぶると全身をふるわせながら、

「親分、御冗談をおっしゃっちゃあ……」

といいかけるのを皆までいわせず、

「死相——それとも凶相かな？ 暗くてよくは見えなかったが、あの娘の背中には、何ともいえねえ暗い魔の影がまつわりついていた。まるで死神を背負って歩いているような感じだった」

「親分！」

「おれの眼力にや狂いはねえ。いやさ、この雲霧仁左衛門が、一旦こうと睨んだからにやあ、万に一つのはずれもねえのだ」

雲霧仁左衛門といえども知る、江戸でも名うての怪盗なのだ。大名旗本、はてはその権門にこびへつらつて、おのれの私腹のみを肥やそうとする豪商などの家屋敷を縦横無尽に荒しまわつて、義賊、俠盜、怪盜、豪盜などと呼ばれたその手口は、今でも口さがない江戸っ子たちが三人集ると、必ず話題にのぼるくらいの華々しさだった。

だが、その悪運もつきたのか、南町奉行所全員をあげての大捕物陣に、その隠れ家を包囲され、逃れられぬと見て、自ら家に火を放ち、その中で自害したといわれたのは、たしか一昨年のことだったのに——さては、それも身替りにたった子分の誰かのしたことで、本人はそれから一年半も身をくらし、ようやくほとぼりのさめるを待って、江戸にふたたび姿を現わしたのだろうか？

その彼が、何の臆面もなく、浅黄裏の頭巾の下、素顔をさらして見せたところから察すると、この植木職久作も、いずれはその輩下で何の某といわれた人物なのだろう。

「そうでござんすかねえ。いや、親分の眼力にやあ、いつでもびつくりさせられることばかりだが、こいつばかりは頂けやせんねえ。今もあの子が立ち止ってくれただけでも、この薄暗え店にばあっと明りがさしてきたように思われたくれえなのに」

雲霧仁左はなおも冷たく、

「木鼠と異名をとったお前にしちやあ、この二年ばかりの間に滅法焼きが廻ったものだ。惚れた眼にや、あばたもえくぼ——というからな。さてはこうして同じ町内に住んでいるうちに、あの子にぞっこん……」

といいかけて、店先を通りかかった人影に気がついたか、急に言葉の調子を変えた。

「親父、この松はいくらだ？」

「へえ、どれ、これでござんすか？ 二分ではいかがでござんしょう？」

「二分——それはまたいい値をつけたものではないか。たかが盆栽の松一つに、はははは、こちらの懐を睨んでたんまり絞れると読んだのか。それともほかに何か考えごとをしていて値段を間違えたの

か？」

といいながら、仁左も久作も、店先にたたずんで動こうともしない女の方へ、鋭い横眼の視線を投げた。

「御同業かな？」

仁左衛門がひくくつぶやいたのも無理はない。

紫の被布にすらりとした身を包み、紫のお高祖頭巾に顔を隠して、人相もはっきりとはわからないが、年増女の色気とは全く違った妙な雰囲気、その全身にただよっている。

それは、妖気とも、殺気とも、鬼気とも、何とも一言ではいいあらわしようのない奇怪きわまる体臭だった。

「あの……ちよつとおたずねいたしますが」

という声も、まるで地の底からでも響いてくるように、奇妙に陰にこもって聞えた。

「へえ、旦那、ちよつとお待ちくださいませ。むこうのお客さまが御用だとおっしゃるんですばやく眼くばせをして、久作は仁左衛門のそばを離れた。

「へえ、御新造さん、お待ち遠さまでございました。何を差上げましょうか？」

「その、別に……」

女はちよつと口ごもった。だが一瞬に腹をきめたか、きっぱりとした口調で、

「あの、たしかこの近くとうかがって参ったのでございますが、鬼雷様とかおっしゃる将棋の駒作師のお宅はどちらでございましょう？」

「おたくさまが将棋の駒をお買いになりますんで？」

久作は、一応駄目を押しながら、奥の仁左衛門へ鋭く目くばせをした。

江戸三奇人、六奇仙——そこまでいつては、あるいははめすぎにもなるだろうが、駒師鬼雷斎といえ、どんなに安くふんだとしても、江戸三十六奇仙ぐらいには加わる資格もあるだろう。

その奇人たる原因は、まず第一に大食ぶり、第二にはげて物悪食ぶり、いつか両国で催された大食くらべにも、飯を大丼に十七杯、汁十四杯に蕎麦九枚、おまけに雑煮を七杯とわらび餅を軽く十八平げた上、少し腹がもたれたといつては外へ出て、庭の蛎^{なめこ}とペン草を食ったという伝説的な食欲の持主だった。

生れはどこか、これまで何をしていたか、本人は黙して語らないが、ちらちらと時々その口からもれた話では、旅の賭将棋師としても長い間生計を立てていたらしい。

裸になると、仁王のように隆々たる筋骨の持主なのだが、その全身にまるで網をかけたように残っている刀傷の跡は、喧嘩の名残か、それともいかさま博奕でもばれて簀巻きにでもされた跡なのか、どちらにもせよ、ただ者でないことだけはたしかなのだ。

それにまた、これだけの大食漢のことだから、その腕力も一通や二通りのものではない。

たとえば四斗俵を背中に一俵、口に一俵くわえ、両腕に一俵ずつ下げて平気で歩いているのを見た——という噂がひろがっても、誰も否定するものが無いくらいだった。

おそらく、これほど美人のおせんに、誰一人言い寄ったという噂を聞かないのも、この父鬼雷斎の

腕力を恐れてのことなのに違いない。

ただ一方では、この変人の手になった駒は、特殊な筆法を買われて、大名旗本豪商などの愛棋家の間では、この上もなく珍重されているために、これほど人間ばなれのした食欲の持主でも、親子二人の生活には、どうやらことかく日もなかったのだ。

いま、細工台に向つて、深く刻み込んだ駒文字に、漆を埋め込んでいる鬼雷斎の姿は、まるで仕事の鬼に見える。そのまま後から切りつけられて、一瞬に命を失つたとしても、声一つ上げないのではないかと思われるほどの没頭ぶりだった。

「お父さん、ただいま」

とおせんが後から声をかけても返事さえしない。

「すみません。遅くなつちまつて——さぞ、おなかがすいたでしょうね」

心配そうにだめを押ししたが、振り返りもしない。ただ、おひつがそばに引き寄せられて、茶碗と箸とが洗いもせずに投げ出しているところを見ると、おせんの帰りを待ち切れなくなつて、いい加減一人でかたづけただのだろう。

「あら、大変、お父っあんたら！」

毎度のことながら、おせんはおひつの蓋を取つて、くるくると目をまわくした。

「御免なさい。すぐ追いだきをしますから、ちよつと待つて下さいね」

といった時、玄関の方から女の声で、

「御免下さい。鬼雷斎先生のお宅はこちらでございましょうか？」

「はい、どちら様でございましょう？」

玄關の障子を開けて、土間にたたずんでいるお高祖頭巾の女を一目見た時、おせんは何ともいいよ
うのない肌寒い恐しさに襲われた。

「先生は御在宅でございましょうか？」

「はい、あの……ただいま……」

「鬼雷は留守だ！」

「あのお声は？」

「本人だ。本人が自分で留守だというのだから、これほどたしかな事はあるまい」

それから大分押し問答を繰返したあげく、その女はようやく座敷へ上りこんだ。

とはいうものの、そのまま頭巾もぬかず、主の鬼雷斎の方は、腹がへつたせい、すこぶる不機嫌
そうな顔をして、なた豆煙管でふかりふかり煙草をふかしているのだから、まことに奇妙な光景とい
うほかはない。

「実は先生にお仕事をお願いしたいのでございますが」

「御免だよ。初雷が鳴るまでそこに座っていたって引受けねえよ」

「なぜ、なぜでございましょう？」

「積つても見な。第一にその先生呼ばわりが気に入らねえ。師匠、親方、鬼雷さん——とここへ来る
お客はおれをいろいろ呼ぶが、たかが駒作りの職人をつかまえて、先ず生きている——と書くような

先生呼ばわりは分に過ぎる。まるでからかわれているようで、お尻の穴がむずむずしてくる」

鬼雷斎は仏頂面で、煙管で灰吹きをたたきながら、

「それから第二には、人の家へ来て、お前が名前も名乗らねえ、被りものも取らねえというのが気に入らねえ。いったい人にものを頼もうというのに、そんないんぎん無礼な態度があるか！」
名前の通り雷が落ちてきたような言葉だったが、女も微動もしなかった。

「その失礼はおつしやるまでもなく、よく存じておりますが……仔細あって、主人の名前も申せませぬ。この被りものも取れません。ただある所までおいで願つて、駒を一組、作つて頂きたいのでございます」

「第三に、出仕事はまっぴら御免だ！」

「そうでもございましょうが、この木を一寸御覧下さいまし」

女は少しもひるみもせず、帯の間から小さな紙包みを取り出して、鬼雷斎の目の前でひろげて見せた。

「宝黄楊——これは？」
たからつげ

目を爛々と輝かせながら、まるで恋人の肌でもいつくしむように、小さな木切れをさすりながら、鬼雷斎はぼつりとつぶやいた。

「それはただの見本でございます——駒一組作れるだけの材料は、ちゃんと屋敷に準備してございます」

鬼雷斎の態度は、おせん目の目にも明らかにわかるくらいの変化を示した。今までの不愛想な、無感

動な態度も一瞬に消えてしまったようだった。

瞬きもせず、頭巾の中からかすかにのぞく女の両眼を見つめて、

「お前さんは、もしや？」

「おそらく、先生のお察し通りでございましょう。それでも、もしお疑いがあるのなら、この駒を」
女は静かに片手を開いた。いつから握りしめていたのか、その掌の上には、一枚の将棋の駒が、木目もじつとり汗ばんで横たわっている。だが、その上に刻み込れた二文字は、見るも異様なものだった。

「獅子」

女は再び掌を閉じたが、この珍らしい駒文字は、おせんの臉に焼きついて離れなかった。

王将、金将、銀将、桂馬、香車、飛車、角行、歩兵。

将棋の駒の種類は、すべて八つにつくるはず——駒作り師の娘として育ちながら、これ以外の駒文字があることは、おせんもこれまで知らなかった。

鬼雷斎はよろめきながら立ち上ると、戸棚の上から花色木綿の布に包まれた駒箱を下し、

「おせん、御注文の品だが——すぐ、平賀源内先生のところへおとどけてはくれまいか？」

「今すぐですか？ 御飯の支度は？」

「そうだ。今すぐ——飯はいらない」

この父が、食事の支度はいらないなどと言い出したことも、これもおせんにとっては初めての経験なのだった。